

コインの裏表

「ITの進化が社会を変える」といわれるようになって久しい。その顕著な例がインターネットであり、最近では電子マネーの普及もかなりのスピードで進行している。電車に乗る時の光景は昔とは様変わりし、自動券売機の前にできていた行列は、いまではほとんどなくなった。思い出してみれば、昔は電車が到着するまでに切符を買えるかどうかハラハラしたものである。コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどでも、電子マネーで支払いができるようになった。ずいぶん便利な世の中になったものである。

こうした生活スタイルの変化は、独立行政法人造幣局が発表する硬貨発行枚数の減少としても現れており、近年の総発行枚数は年間10億枚程度にとどまっている。

硬貨といえば、造幣局から毎年「ミントセット」なるものが販売されている。これは、その年に鑄造された未使用の硬貨（コイン）一式をパッケージにしたものである。ちなみにミント（Mint）とは貨幣鑄造所（造幣局）のことである。コインコレクターの中にはミントセットを買い集めている人もいるようだが、値上がりを期待しているとしたら、残念ながらそうはいかないだろう。

確かに、1,500円で販売された昭和62年（1987年）のミントセットはコインショップで1万円前後で取引されている。これは、この年の50円硬貨が77万5,000枚しか製造され

ず、ほとんど市中に流通しなかったため、それ以外の年のミントセットはこれほど大きなプレミアムは付いていない。この年のようなケースは例外であろう。

ところで、ミントセットを見てみると不思議なことに気付く。5円硬貨以外は裏面が上になっているように見えるのである。しかし、これは間違いである。ミントセットのコインはすべて表面が上になっている。大きく数字が描かれている方が表だというのは単なる思い込みである。

調べてみると、どうもこういうことらしい。明治期に発行されたほとんどのコインは、その片面に竜の図が描かれている。竜は天皇の象徴とされていたので、明治4年（1871年）の新貨条例でも、竜が描かれた面が表と明確に示されていた。ところが、明治8年（1875年）に貨幣条例に改定された際に「裏表が逆だったので改める」との通達があったという。これは竜が「清国思想」を表すとされたことによるらしい。

このように、明治以来の近代貨幣の裏表は、初めから混乱していたようである。その後、コインの図柄が変わってコインの裏表はまたはっきりしなくなり、ずっとあいまいなまま取り扱われてきた。

外国のコインではこのようなことはまず起こらない。外国のコインは多くの場合、国家



元首のように国を代表する人物や、その国の象徴的な図柄が描かれている。通常はこちらを表とし、これがない方が裏というわけである。日本の場合は、天皇の肖像が磨り減ってはいけないという理由で代わりに竜の図を入れたのだが、これが混乱の元になったのは上に述べたとおりである。

では現在はどうかという、心配には及ばない。法的に定められているわけではないが、造幣局は「年号の入っている面が裏、年号のない面が表」としている。第2次世界大戦後、それまでのあいまいな状態を解消するため、裏表の扱いを当時の大蔵省内で協議して決めたのである。今後は5円硬貨のデザインを変えてくれればさらにすっきりするのだが…。

この話は、どんなことに対してもマネジメントが重要だということをあらためて考えさせる。つまり、最初に方針を決めずに行き当たりばつたりのやり方をしていると、日本のコインのように裏表がはっきりしない状態に陥ってしまうということである。

IT業界に身を置く者にとって、マネジメントの重要性は言うまでもないことに思われるだろう。確かにシステムを構築する局面では、多くの人が関わるためにいわゆるプロジェクトマネジメントが必須である。これを否定する人はまずいない。問題は、システムは単に構築されればよいというものではないことである。安定的に稼働し、業務・ビジネス

に使うことができはじめて役立つのである。システムの稼働とそれに関するもろもろの運営は“ITサービス”と呼ばれるが、高品質のITサービスが安定的に提供されなければ、どんなに優れたシステムであっても意味がない。ところが、その割にはITによる価値あるサービス提供という視点からの明確な方針は、一般的にはあまり重視されていないように思えるのである。

このITサービスのマネジメントに関する国際規格が、2005年12月にまとめられたISO 20000である。ISO 20000には、ITサービスを提供する者への要求事項と、ITサービスマネジメントの実施基準が書かれている。また、品質向上やビジネスリスクの削減を目指すとともに、生産性向上や長期コストの削減も視野に入れられている。

このような規格に基づく明確な方針があってはじめて品質の高いITサービスが可能になる。多くのサーバーを預かるデータセンターではこのことが特に重要であり、サービスの継続的な改善にも、システムの運用に携わる人材の能力向上にも取り組むことが必要になる。

ITの進化が今後も社会を変え続けるであろうことは疑いようがない。そうした社会を支えるのが安定的なITサービスであり、システム運用は未来を切り開く重要な要素であると、あらためて認識する必要がある。■